

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

陶氏は、周防国(山口県)の武家大内氏の家臣で、中でも隆房は戦国大名大内義隆の全盛期を支えた重臣の一人です。

ところが、やがて主君義隆に不満を持つようになった隆房は、天文20(1551)年8月に挙兵して山口を攻め、9月1日に長門国深川(山口県長門市)の大寧寺にこもった義隆を自害に追い込みました。この家臣陶隆房が主君大内義隆に対して起こした政変を「大寧寺の変」と呼びます。

陶隆房

大寧寺の変から大友晴英の大内家入り、そしてその後の大内義長の治世については、これまで逆臣陶隆房の謀反で成立した非正当な政権と見なされ、義長を大内家歴代当主として認めない風潮がありました。また、大友義鎮も弟晴英の大内家入りには懐疑的で、反対を押し切って大内家家督となった晴英が、5年後の弘治3(57)年に毛利元就に攻められた際には、援軍を送らずに見殺しにしたとされてきました。

しかしながら、近年、陶隆房が義隆排斥の兵を挙げる2カ月前の段階で、弟晴英に付き従って山口に渡る家臣の人選を秘密裏に済ませていたことを証する、大友義鎮書状の存在が明らかになりました。

政変を企て、宗麟と密約

すなわち、陶隆房のクーデター計画とその後の大内義長政の間に「内々の儀」(密約)の樹立については、実行側として擦り合わせができてい



宮島に立つ「厳島台戦跡」の説明板(広島県廿日市市)

たのです。

天文21(52)年、弟晴英の山口入りに際して兄の義鎮は、かつて大内氏の祖琳聖太子が、海路を渡って周防国多々良浜(山口県防府市)に上陸したとする故事に倣って、晴英を2月29日に多々良浜に着船させ、3月3日に大内氏館入りする儀式を挙行します。これは、新たに擁立する大内義長を、大内家の正當な家督継承者として内外に示す「セレモニー」でした。

一方、晴英を迎える陶隆房の方も、新当主への忠誠を示すため、晴英の諱を得て、自らの名を「晴賢」と改めます。

こうして、陶・大友の密約通りに樹立した大内義長政権でしたが、そのピークは長く続きませんでした。同24(弘治元)年、安芸国(広島県)から勢力を拡張させた毛利元就軍との厳島台戦(同県廿日市市)に敗れ、隆房は35歳で没したのです。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1日掲載